

## そこは珊瑚礁の海だった

海という、地球の7割を占めるほどに広大な広がりの中で、熱帯の珊瑚礁はそのわずか0.1%の面積だといえます。そこに、全海水魚の4分の1もの種類の魚が住んでいるのは、それだけ豊かな生態系がはぐくまれている証。これは、NHKで放送していた「プラネット・アース」という番組で語られていた事です。僕は今回の宝船展を見て、突飛な比喩かもしれませんが、そんな珊瑚礁の海のような印象を受けたのです。

少し説明が必要でしょう。今回の宝船展のテーマは、「オープンスタジオ 想像の海へ!」です。ギャラリートークの日、そのことを意識せずに会場に足を踏み入れたのですが、最初に目に入った作品が矢花さんと子どもたちによる巨大な壁画でした。地下の展示室ということも関係していたのかもしれませんが、天井の高い空間の天井ぎりぎりの高さに掲げられていたことで、車椅子の僕にとっては海中から水面を見上げるような感覚になっていました。そこに繰り広げられていた色彩に満ちた子どもたちや花や生き物たちの浮遊するようす、空間を埋める珊瑚の産卵のような点々…。ここで僕の感覚の中に珊瑚礁が準備されてしまったようです。

続いてのソナンタさんの「海の世界」という作品について、「なぜ海なのですか?」という質問をしてしまった僕は、「テーマが海ですから」というお答えに、自分を恥じました。それ以降、「海」を意識するように見てまわると、先程の珊瑚礁のイメージが存在感を増してきたのです。ここは、ただの海ではない、想像の海。新たな命が生まれ、多様な生態系を支える珊瑚礁の海なのではないか。

車椅子で、流れるように移動していたので、水中を泳ぐ感覚と近かったせいかもしれません。壁面を飾る大小の作品は魚たちを、床から立ち上がる作品は海藻類を、鮮やかな色の座面をもった椅子はイソギンチャクを連想させます。ウルスの皆さんのオブジェは、立ち上がる岩礁か、はたまた沈没船か。ただ、そういった形態上のアナロジーを超えて、ここの作品群が相互関係しながら生み出している全体に注目すべきだと気付きはじめるのです。

たとえば、中村隆さんのスケッチが、色とりどりの魚が列をなすように壁面を泳いでいます。すると、おとなりの柴山さんのスピーカーたちが、その魚たちの列を横断して音を出しています。普通、美術館の壁面というのは、額に入って回りの空間から

独立し、作家の個性・作品性を保証された作品が整列しているものでしょう。そういった古典的(?)な美術を鑑賞する制度が、ここでは軽々と乗り越えられて、重なりあい、侵略しあい、作品の境界は融け合って展示室全体が珊瑚礁のような豊饒な世界を造っている…。

さらに、ここが珊瑚礁に見えたのは、海全体との面積比とも関係するのですが、「こんなところ、めったにない」と感じたからです。僕らが日常生活している現代都市のなかで、こんなに自由な空間は、超レア・ケースなのではないでしょうか。県立美術館という公の場所でありながら、世の中の権威や、ジャンルや、年齢性別や商業主義からも自由。特定の共同体という訳でもなく、主義主張を一にするでもなく、お互いを尊重しながら干渉する訳でもなく、自分の表現を精一杯生きている。珊瑚礁の生態系が絶妙なバランスで成り立っているように、上からの力ではなく相互の微調整の総体として成り立っている空気感とでもいうような…。これこそ、SMFという運動体が時間をかけて培ってきた宝なのかもしれません。

奥の暗い部屋は、大陸棚の崖の下。みゃうかさんの月は、海の環境に鼓動を与える潮の満ち引きを支配しています。すると床に開いた井戸は、江戸の裏路地の共同井戸というより、海底火山の噴火口に見えてきます。その噴火口、あるいはカルデラの縁に三々五々集まって、中を覗き込みながらラウンドテーブルが行われました。噴火口から噴き出してくるのは、「夢のシート」です。地中からの熱によって有機物が生命体へと変貌するように、皆さんの夢が自由な会話の中から新しいアートへと動き出す…。暗闇の中、参加者の視線は「夢のシート」に向けられて、お互いに面と向かっての対話でなかったため、自由に意見がつぶやけたのもよかったと思います。ギャラリートークより、発想の原点が感じられる場面もありました。壁の内側に散りばめられていたルーローの三角形は、幾何学図形なのにどこか有機的なものへの橋渡しをするようで、静から動へ、夢が転がりはじめてアートになる、ロータリーエンジンの比喩にも見えました。

珊瑚礁にせよ海底火山にせよ、生々流転のエネルギーの源はビッグバンにあって、それが宇宙という場を突き動かしているそうです。この宝船展のような場でこそ生かされる、我々の内なる表現への希求が確かにあることを実感しました。